

近代における漢学と僧侶—東京帝国大学文科大学に学んだ真宗僧を中心として—

二松学舎大学非常勤講師 川邊雄大

はじめに

筆者はこれまで、明治期における東本願寺（真宗大谷派）の中国布教と、同上海別院における日中文化交流について研究を行ってきた。

その過程で、幕末維新时期に活躍した真宗僧の中に、漢学塾・咸宜園の出身者が多くいたことに着目し、咸宜園と真宗僧との関わりについて検討した。そして、明治維新後に東本願寺と明治新政府との関係構築、明治5年（1872）の東本願寺一行による海外宗教事情視察も、咸宜園と真宗僧との人脈によって行われたことを明らかにした。

そして、明治9年から開始された海外布教（清国・朝鮮）においても咸宜園出身の真宗僧が中心的な役割を果たし、日清戦争後におこった本山改革運動や当時の清国布教においては、東京帝国大学の卒業生が活躍したことを検討した。

従来、真宗関係の教学あるいはその教育機関であった高倉学寮（東本願寺）・学林（西本願寺）や明治期に設置された宗門学校などに関する研究はあるものの、真宗僧の主要学問の一つである漢学について言及した研究は殆どないのが実情である。

そこで、本稿では東本願寺を中心に幕末明治期に遡って真宗僧と漢学の関わりについて検討するとともに、東京帝大文科大学で学んだ真宗寺院出身者が果たした意義について検討する。

1 幕末維新时期の真宗僧と漢学

冒頭に述べた、漢学塾・咸宜園は「近世最大の私塾」といわれ、広瀬淡窓によって豊後・日田に開設された。そもそも咸宜園の前身は文化2年（1805）、日田の長福寺学寮（東本願寺）に間借りする形で始まり、淡窓自身も長福寺住職をはじめとする真宗僧から漢学を学んでおり、真宗との関係が深かった。しかも、咸宜園の塾生の三分の一は僧侶で、さらにその三分の二は真宗僧であった。

一方、本山の教育機関である高倉学寮においても漢学の講義は行われており、慶応4年（1868）にキリスト教の流入に対抗するために設置された「護法場」では、漢訳聖書・洋書を用いてキリスト教の研究を行われていただけでなく、「論語」の講義も行われていた。明治3年当時、護法場は「漢学の道場」となっており、「護法場の規矩はすっかり咸宜園風に変つてゐた」（南條文雄『懐旧録』昭和2年）のであった。

明治5年（1872）、東本願寺一行（大谷光瑩・松本白華・石川舜台・関信三・成島柳北）は海外宗教視察において欧洲のサンスクリット学の発達を実際に目にした。一行の帰国後、東本願寺は本山内に翻訳局（局長：成島柳北）を開設し、サンスクリット・キリスト教文

献の翻訳を開始した。従来、日本仏教は漢訳聖書・洋書などの漢文文献によって仏教をはじめサンスクリット・キリスト教等の知識を得ていたが、この翻訳局の設置により漢文を介さず欧文から直接、これらの知識を受容しようとしたことは一つの転換点であった。

さらに、明治9年(1876)に笠原研寿・南條文雄をロンドンに留学させ、マックス・ミュラーのもとでサンスクリットを学ばせた。また、明治6年(1873)に小栗栖香頂が北京に派遣され、中国仏教だけでなくチベット仏教(ラマ教)にも関心を持つようになり、明治30年代に寺本婉雅・能海寛をチベット探検に派遣された。

この時期、東本願寺では本山の改革のみならず、教育制度の改革も行われた。明治6年(1873)、高倉学寮と護法場は貫練場と改称され、明治8年(1875)新たに教師教校・育英教校・大教校・中教校・小教校が設置された。

海外布教も開始され、上海(明治9年)・北京(明治10年)と釜山(明治11年)には別院が設置され、各別院内に語学学校(上海・江蘇教校、北京・直隸教校、釜山・韓語学舎)も設置され、日本から派遣された留学生が現地語の習得を行った。

2 明治期の真宗僧と漢学

維新後、新たに設置された育英教校は、各地の真宗寺院から優秀な子弟を集めた学校で、主な卒業生に稲葉昌丸・清沢満之らがあり、彼らは内地留学生として上京し大学予備門(のち一高)・東京帝国大学に進学している。

この育英教校は一時中断されたものの再開され、資料①北方心泉「備忘録」(本稿末尾に掲載)に見られるように、明治二十年代後期以降、育英教校や公立学校から一高・東京帝大に入学する多くの真宗寺院の子弟が増加した。

明治26・27年(1893・94)、東京で一高・東京帝大や哲学館の学生により夏期講習会が主宰され、多数の学生が参加しているが、その多くは宗門出身者であった。

明治28年(1895)、清沢満之・稲葉昌丸・今川覺神・清川円誠・月見覺了・井上豊忠の若手僧侶6名で白川党が結成され、本山の改革を提唱したが、彼らの多くは東京帝大の卒業生であった。これに当時真宗大学生であった多田鼎(のち帝大生)・佐々木月樵・暁烏敏らが加わったほか、村上専精・南條文雄・井上円了らがこれを支持し、翌年に宗務の長であった執事の渥美契縁を辞職に追い込んだ。

東京帝大に学んだ真宗出身者の特徴として、文科大学に在籍した者が多く、中でも哲学科・漢学科に比較的集中していることがあげられる。これは明治三十年代後半以前、印度哲学・宗教学専修等が設置されておらず、彼らは哲学科・漢学科(明治27年1期卒)に所属し、宗教学・仏教学を学んでいたためと思われる。

次に資料②小栗布岳「日記」(本稿末尾に掲載)を見てみると、明治40年(1907)当時、すでに哲学科内に印度哲専修(明治40年1期卒)・倫理学専修(明治38年1期卒)・宗教学専修(同)が設置されているため、哲学科(哲学及哲学史)や同(支那哲学専修(旧漢

学科)) よりむしろこれらの専修で学ぶ学生が増加している。

このほか、主な西本願寺出身の東京帝大卒業生に、島地雷夢(哲学科、明治36年卒)梅上尊融(文学科・言語学専修、明治37年卒)、大谷勝真(支那史学、明治41年卒、のち学習院教授)などがいる。

しかも、学生だけでなく、井上円了・南條文雄・高楠順次郎・常盤大定・村上专精・吉谷寛寿のように東京帝大の教員になった者もあり、真宗関係者が文科大学のインド哲学など特定の分野において教員・学生のかなりの数を占めていたものと思われる。

なお、明治後半には京都帝国大学が設置され、ここでも真宗寺院出身の学生が哲学・印度哲学を学んでいる。

一方、宗門の教育機関である貫練場は、貫練教校(明治12年)・真宗大学寮(明治15年)と改称され、明治29年(1896)にはこれに替わって真宗大学および真宗高倉大学寮が設置された。明治34年(1901)年、真宗大学は東京巣鴨に移転・開校したが、初代学監(学長)に清沢満之、第2代に南條文雄、第3代に佐々木月樵、第4代に村上专精、第5代に稲葉昌丸と、いずれも白川党をはじめとした本山の改革運動に従事した人物であるだけでなく、佐々木以外は東京帝大出身者あるいは教師だった人物である。なお、真宗大学は明治37年(1904)に専門学校令により認可され、明治44年(1911)には同校と高倉大学寮を合併して真宗大谷大学と改称、大正2年(1913)に京都・上賀茂小山へ移転、大正11年(1922)に大谷大学として大学令による設立を認可されている。

このほか、井上円了が創設した哲学館でも多くの真宗寺院出身者が学んでおり、チベット探検に派遣された能海寛や、田中善立や安藤正純のように代議士・国務大臣となる人物を輩出している。

おわりに

以上見てきたように、幕末期まで咸宜園をはじめとする漢学塾や高倉学寮で学んでいた真宗僧は、明治以降は新制度の宗門学校で学ぶようになっただけでなく、優秀な者は宗門の内地留学生として大学予備門・一高・東京帝大に、のちには京都帝大へも進学するようになった。

そして、東京帝大へ進学した者の多くは文科大学に在籍し、明治20年代から30年代前期にかけてはとくに哲学科・漢学科といった学科に在籍していたが、のちに印度哲学学科・倫理学科・宗教学科が開設されるとこの方面に在籍する者が増加し、引き続き宗教学・仏教学(含インド哲学)を学んだ。

つまり、宗教学・印度学が開設される以前においては、漢学科は哲学科とともに宗教学とくに仏教学を研究するにあたって有効な学問であると見なされていたといえる。

そして、明治期における真宗寺院出身の東京帝大卒業生および教員は、本山の改革運動(白川党・浩々洞)にも主導的な役割を果たすとともに、さらに東京帝国大学をはじめと

する帝国大学の教員、あるいは宗門大学の教員となり、日本の宗教学・仏教学・インド学をはじめとして各分野の研究に従事した。また、中学・高校の教員となるものも多く、このほか政界・実業界で活躍した卒業生もいたのである。

資料① 北方心泉「備忘録」(明治30年代、金沢・常福寺蔵) ※印は筆者註

南條文雄」(越前) 梵学 ○私費生/x帝大外 ※東京帝大文科大学梵語学嘱託講師

井上円了」(越後) 哲々 十八年卒業 ※予備門卒、哲学館創始者

清沢満之(三河) 哲々 廿年々 ※予備門卒、白川党、真宗大学初代学監

今川覺神(カ、) 物理 廿年々 ※予備門卒、白川党

x井上豊忠(羽前) 政治 廿六年々(?) ※白川党

x村上専精(三河) 宗餘乗 ? ※哲学館講師、東京帝大初代印哲教授、大谷大学長

稲葉昌丸(大阪) 動物 廿二年々 ※一高卒、白川党、真宗中学・大谷大学長

柳祐信」(越前) 哲々 廿一年□

清川円誠(越後) 哲々 二十七年卒 ※一高卒、白川党

月見覺了(近江) 歴史 廿八年々 ※一高卒、白川党、専科か?

藤岡勝二」(京ト) 博言 卅年卒 ※東京帝大教授(アルタイ語系言語研究)

吉田賢龍(カ、) 哲 卅年卒 ※三高卒、広島文理科大学初代学長

○金 義鑑(尾) 哲 同

○武宮 環(肥前) 博 同

近角常観(江) 同 卅一年卒 ※一高卒、宗教家

伊藤賢道」(イセ) 漢文同 ※一高卒、漢学科首席卒、杭州日文学堂長、『台湾日々新報』漢文欄編輯長、台湾総督府官房調査課、台北帝国大学図書館

七里辰次郎」(尾) 国史 同 ※仏教史家

常盤大定(陸前) 哲□ 同 ※一高卒、東京帝大教授、中国仏教遺跡調査

旭野恵憲(江) 漢文 々

春日円城(?) 史学 卅二年々

秦敏之(和泉) 同 同 ※首席卒業、シンガーミシン裁縫学院創始者

石川成円(三河) 地質 同

高橋慶□(江) 英文 同

虎石恵実(□□) ? 同 ※新潟出身、函館高等女学校長

○今川一(カ、) 化学 同

○富士沢信隆」(カ、) 哲 々

○丸山環(江) ? 卅三年卒 ※八高教授、第三代六高長

和田鼎(三河) 史学同 ※東洋女学校教頭

佐々木宗要(大阪) 哲 同 ※京都府立医大英語学初代教授

村上龍英(三河) 漢文卅四年々 ※五高漢文教師

鳥居賢順（カ、）政治

南浮智成（江）政治 卅三年々 ※彦根高商教官、私立東華高女第六代校長

永井涛江（羽前）哲 卅四年、

西派学士

藤井宣正 埼玉尋常（哲） 二十四年卒 ※大谷探險隊員、客死

蘭田宗恵 文学寮（〃） 廿五年、 ※大谷探險隊員

龍口了信 広業尋中（国史）廿七年、 ※広島 高輪中学創立者、衆議院議員

山内晋（※晋卿）鹿児島尋中（漢文） ※島根、三高教授、九州帝大専任講師

廣田一乗 東京私立（哲） 廿九年、 ※新発田中学第2代校長

佐竹観海（同） 三十年、 ※東京

野々村直太郎（同）同 ※鳥取、龍谷大教授

酒生慧眼 ※東京高輪大学長、大阪商業学校長

（※これらの氏名の中には東大の卒業名簿上で確認できない者もあり、中退者や専科出身者も含んでいると思われる）

資料② 小栗布岳「日記」（明治40年、佐伯・善教寺蔵）新聞切抜

僧侶の帝国大学卒業生

僧侶出身にして、本年（明治40年・1907）東京帝国大学を卒業したる人々は、英吉利法律科・豊水道雲（真宗、広島）（※大審院第一民事部長）、独逸法律科・岡田晋（真宗、愛知）、哲学史科・金仙宗諄（不明、愛知）、支那哲学科・相馬種丸（真宗、大分）、朝倉暁端（真宗、福井）（※本願寺派執行長）、印度哲学科・長井真琴（高田派、福井）（※印哲1期、帝大講師、東洋大教授）、独文科・日野香水（真宗、山形）、倫理学科・今沢滋海（不明、愛媛）（※日比谷図書館頭、図書館協会会長、図書館員教習所教員）、若槻道隆（真宗、長野）（※台湾総督府内務局文教課視学官、同図書館代理館長、台南工高（現成功大）校長）、生姜塚慶量（真宗、新潟）、五島法眼（不明、山口）、観山覚道（真宗、広島）（※崇徳中学初代校長）、大峽秀栄（不明、山形）（※宮崎中学教頭）、佐々木義宜（不明、東京）（※慶応大学教授）、佐藤鉞巖（真宗、愛知）、宗教学・鈴木宗忠（不明、愛知）（※東北帝大教授・宗教哲学）、早船慧雲（不明、埼玉）（※新潟医科大学）、林光宜（真宗、福井）、国史科・長沼賢海（真宗、新潟）（※東京府立一中教諭、広島高師教授、九州帝大教授）□十九氏□して、中にも今沢、長沼の両氏は何れも首席を以て卒業せられたり

前言

筆者至今的研究內容主要著眼於明治時期東本願寺（真宗大谷派）的中國傳教活動以及該寺上海別院的日中文化交流。

有關研究過程，筆者聚焦於幕末維新時期活躍的真宗僧中，佔其多數的漢學塾、咸宜園出身人士，探究咸宜園與真宗僧的關係，並闡明咸宜園與真宗僧的人脈，在明治維新後東本願寺與明治新政府的關係締結，以及明治 5 年（1872）東本願寺的海外宗教視察活動中的重要性。此外，明治 9 年起展開的海外傳教活動（清國、朝鮮）中，也是由咸宜園出身的真宗僧擔任要角，而東京帝國大學的畢業生則活躍於日清戰爭後的本山改革運動或是當時的清國傳教活動。

至今，已有不少先行研究論述到與真宗關聯的教學，或是高倉學寮（東本願寺）、學林（西本願寺）、明治時期設立的宗門學校等的真宗教育機構，但卻很少研究論及作為真宗僧主要學問之一的漢學。

基於此，本論以東本願寺為中心，考察幕末明治時期真宗僧與漢學的關係，並探討真宗寺院出身的東京帝大文科大學學生在漢學研究上的定位與意義。

1 幕末維新時期的真宗僧與漢學

開頭提及的漢學塾、咸宜園被稱為「近世最大的私塾」，由広瀬淡窓創辦，設於豐後、日田一帶。咸宜園的前身為文化 2 年（1805）借為日田長福寺學寮（東本願寺）所用的設施，當時淡窓向擔任長福寺住持的真宗僧學習漢學，與真宗締結相當密切的關係；且咸宜園有三分之一的塾生為僧侶，其中的三分之二為真宗僧。

另一方面，作為本山教育機構的高倉學寮也設有漢學講座，慶應 4 年（1868）設立「護法場」與基督教相抗衡，不僅使用漢譯聖經、洋書進行基督教研究，還開設「論語」講座。明治 3 年護法場成為「漢學道場」，「護法場的規矩搖身一變，變得帶有咸宜園的風格」（南條文雄《懷舊錄》昭和 2 年）。

明治 5 年（1872），東本願寺一行人（大谷光瑩、松本白華、石川舜台、關信三、成島柳北）在海外宗教視察途中，體會到歐洲梵學的盛行。一行人歸國後，東本願寺在本山開設翻譯局（局長：成島柳北），著手翻譯梵教、基督教的文獻；在過去日本佛教透過漢譯聖經、洋書等的漢文文獻來汲取梵教、基督教等的知識，但在翻譯局設立後，可以不必透過漢文媒介，直接以歐語獲取梵教、基督教相關知識。

明治 9 年（1876）更派遣笠原研壽、南條文雄至倫敦留學，在馬克斯·謬勒身邊學習梵語。此外，明治 6 年（1873）派遣小栗栖香頂至北京，將學習觸角從中國佛教擴展至西藏佛教（喇

嚙教)，並於明治 30 年代派遣寺本婉雅、能海寬至西藏探險。

幕末維新的這段期間，東本願寺除了實施本山改革之外，也進行教育改革。明治 6 年（1873）高倉學寮和護法場更名為貫練場，明治 8 年（1875）新設教師教校、育英教校、大教校、忠教校、小教校。

此外也展開海外傳教活動，分別在上海（明治 9 年）、北京（明治 10 年）以及釜山（明治 11 年）設立別院，各別院則設有語學學校（上海・江蘇教校、北京・直隸教校、釜山・韓語學舍），讓來自日本的留學生學習當地語言。

2 明治時期的真宗僧與漢學

明治維新後，新設的育英教校招攬各地真宗寺院的優秀子弟，稻葉昌丸、清澤滿之為首的畢業生以內地留學生的身分上京，進入大學預備門（之後的一高）、東京帝國大學就讀。

育英教校雖曾有短暫的空窗期，然而如資料①北方心泉「備忘錄」（詳見稿末）所示，明治二十年代後期開始，有相當多的育英教校或公立學校畢業的真宗寺院子弟進入一高、東京帝大就讀。

明治 26、27 年（1893、94），在東京由一高、東京帝大或哲學館學生舉辦的夏季講習會，其參加者也大多為宗門出身的學生。

明治 28 年（1895），清澤滿之、稻葉昌丸、今川覺神、清川円誠、月見覺了、井上豐忠等六名年輕僧侶創立白川黨，提倡本山改革；黨內成員大多為東京帝大畢業生，當時還是真宗大學生的多田鼎（後為帝大生）、佐佐木月樵、曉烏敏等人也入黨，村上專精、南條文雄、井上円了等人也相當支持該黨，讓當時的宗務長渥美契緣在隔年被迫請辭。

就讀於東京帝大的真宗出身學生多為文科大學生在籍生，且多數專攻哲學科、漢學科；原因在於明治三十年代後半之前，並沒有設置印度哲學、宗教學等專修科系，他們只能進入哲學科、漢學科（明治 27 年 1 期畢業）學習宗教學、佛教學。

另外根據資料②小栗布岳「日記」（詳見稿末）所載，由於明治 40 年（1907）哲學科已設有印度哲專科（明治 40 年 1 期畢業）、倫理學專科（明治 38 年 1 期畢業）、宗教學專科（同前），比起哲學科（哲學及哲學史）或是支那哲學專科（舊漢學科），專攻這些科目的學生大為增加。而西本願寺出身的東京帝大畢業生主要有島地雷夢（哲學科，明治 36 年畢業）、梅上尊融（文學科，專攻語言學，明治 37 年畢業）、大谷勝真（支那史學，明治 41 年畢業，後為學習院教授）等人。

不只是學生，其他還有像是井上円了、南條文雄、高楠順次郎、常盤大定、村上專精、吉谷覺壽等東京帝大的教師；在文科大學的印度哲學等特定領域的教師以及學生，有相當高的比例都和真宗有密切的關連。

此外明治時期後半設立的京都帝國大學，也有真宗寺出身的學生在此學習哲學、印度哲學。

另一方面，作為宗門教育機構的貫練場歷經了貫練教校（明治 12 年）、真宗大學寮（明治 15 年）兩次改名後，在明治 29 年（1896）成為真宗大學及真宗高倉大學寮；明治 34 年（1901

年)，真宗大學遷至東京巢鴨，從首任學監（校長）清澤滿之、第二任學監南條文雄、第三任佐佐木月樵、第四任村上專精，到第五任學監稻葉昌丸，各個都是出身自白川黨並曾參與本山改革運動的人物，不僅如此，佐佐木之外的其他人不是畢業於東京帝大，就是曾執教鞭。真宗大學於明治 37 年（1904）依專門學校令取得許可，明治 44 年真宗大學與高倉大學寮合併、更名為真宗大谷大學，大正 2 年（1913）遷校至京都上賀茂小山，大正 11 年（1922）依大學令正式命名為大谷大學。

此外，也有相當多的真宗寺院出身者在井上円了創辦的哲學館中學習，像是之後被派遣至西藏探索的能海寬，還有之後成為代議士、國務大臣的田中善立、安藤正純等的優秀人才。

結論

綜合以上，到幕末時期為止於咸宜園等漢學塾、高倉學寮學習的真宗僧，在明治時期之後，不僅轉至新制的宗門學校學習，成績優異者還會選選為內地留學生，升學至大學預備門、一高、東京帝大、京都帝大。

而進入東京帝大的學生多為文科大学在籍生，明治 20 年代到 30 年代前期主要集中在哲學科、漢學科等科系；在印度哲學學科、倫理學科、宗教學科設立之後，有更多學生進入這些科系，繼續學習宗教學、佛教學（含印度哲學）。

簡而言之，在宗教學、印度學設立以前，漢科學和哲學科被認為是研究宗教學——特別是佛教學——一門相當有利的學問。

另外明治時期真宗寺院出身的東京帝大畢業生及教師，在本山改革運動（白川黨、浩浩洞）中佔有主導地位，這些人在其後更成為東京帝國大學為首的帝大教師、或是宗門大學的教師，從事日本宗教學、佛教學、印度學等各大領域的研究；而畢業生多數成為中學、高中的教師，其他還有不少人活躍於政治界、業界。

資料①北方心泉「備忘錄」（明治 30 年代。藏於金澤常福寺）※為筆者註

南條文雄」（越前）梵學○自費生／x帝大外※東京帝大文科大学梵語囑託講師

井上円了」（越後）哲學十八年畢※預備門畢，哲學館創辦人

清澤滿之（三河）哲々廿年々※預備門畢，白川黨、真宗大學首任學監

今川覺神（カ、／KA、）物理 廿年々※預備門畢，白川黨

x井上豐中（羽前）政治 廿六年々（？）※白川黨

x村上專精（三河）宗餘乘 ？ ※哲學館講師，東京帝大首任印哲教授，大谷大校長
稻葉昌丸（大阪）動物廿二年々※一高畢，白川黨，真宗中學、大谷大校長

柳祐信」」（越前）哲々 廿一年□

清川円誠（越後）哲々二十七年畢※一高畢，白川黨

月見覺了（近江）歷史廿八年々※一高畢，白川黨，專科？

藤岡勝二」（京都）博言卅年畢※東京帝大教授（研究阿爾泰語系語言）

吉田賢龍（カ、ノKA、）哲卅年畢※三高畢，廣島文理科大首任校長

○金義鑑（尾）哲同

○武宮 環（肥前）博 同

近角常觀（江）同卅一年畢※一高畢，宗教家

伊藤賢道「」（伊勢）漢文同※一高畢，漢學科第一名畢業，杭州日本學堂長，《台灣日日新報》

漢文專欄編輯長，台灣總督府官房調查課，台北帝學大學圖書館

七里辰次郎「」（尾）國史同※佛教史家

常盤大定（陸前）哲□同 ※一高畢，東京帝大教授，中國佛教遺跡調查

旭野惠憲（江）漢文々

春日円城（？）史學卅二年々

泰敏之（和泉）同同※第一名畢業，SINGERMISHIN 裁縫學院創辦人

石川成円（三河）地質同

高橋慶□（江） 英文 同

虎石惠実（□□）？同※新潟出身，函館高等女校長

○今川一（カ、ノKA、） 化學 同

○富士澤信隆「」（カ、ノKA、）哲 々

○丸山環（江） ？ 卅年畢※八高教授，第三任六高長

和田鼎（三河）史學同※東洋女學校教頭

佐佐木宗要（大阪）哲同※東京府立醫大英語學首任教授

村上龍英（三河）漢文卅四年々※五高漢文教師

鳥居賢順（カ、ノKA、）政治 〃

南浮智成（江）政治卅三年々※彦根高商教官，私立東華高女第六任校長

永井濤江（羽前）哲卅四年、

西派學士

藤井宣正崎玉尋常（哲）二十四年畢※大谷探險隊員，客死

藺田宗惠 文學寮（〃） 二十五年畢業※大谷探險隊員

龍口了信廣業尋中（國史）廿七年、※廣島 高輪中學創辦人，眾議院議員

山内晉（※晉卿）鹿兒嶋尋中（漢文） ※島根，三高教授，九州帝大專任講師

廣田一乘東京私立（哲）廿九年、※新發田中學第2任校長

佐竹觀海（同）三十年、※東京

野野村直太郎（同）同※鳥取，龍谷大教授

酒生慧眼※東京高輪大學長，大阪商業學校長

（※以上名單中有部分未列在東大畢業生名冊中，未列於名冊上的學生可能已退學或為專科出身。）

資料②小栗布岳「日記」（明治40年。藏於佐伯善教寺）剪報

帝國大學畢業的僧侶

僧侶出身，且今年（明治 40 年、1907）畢業於東京帝國大學的學生如下：英吉利法律科豐水道雲（真宗・廣島）（※大審院第一民事部長）、德國法律科岡應晉（真宗・愛知）、哲學史科金仙宗諄（不明・愛知）、支那哲學科相馬種丸（真宗・大分）、朝倉曉瑞（真宗・福井）（※本願寺派執行長）、印度哲學科長井真琴（高田派・福井）（※印哲 1 期生、帝大講師、東洋大學教授）、德文科日野香水（真宗・山形）、倫理學科今澤滋海（不明・愛媛）（※日比谷圖書館館主、圖書館協會會長、圖書館員教習所教師）、若槻道隆（真宗・長野）（※台灣總督府內務局文教課視學官，台灣總督府圖書館代理館長、台南高工（現成功大學）校長）、生薑塚慶量（真宗・新潟）、五島法眼（不明・山口）、觀山覺道（真宗・廣島）（※崇德中學首任校長）、大峽秀榮（不明・山形）（※宮崎中學教頭）、佐佐木義宜（不明・東京）（※慶應大學教授）、佐藤鉞嚴（真宗・愛知）、宗教學鈴木宗忠（不明・愛知）（※東北帝大教授，宗教哲學）、早船慧雲（不明・埼玉）（※新潟醫科大學）、林光宜（真宗・福井）、國史科長沼賢海（真宗・新潟）（※東京府立一中教諭、廣島高師教授、九州地大教授）□十九名□。其中今澤、長沼兩人以第一名成績畢業。

近代における漢学と僧侶—東京帝国大学文科大学に学んだ真宗僧を中心として—

二松学舎大学非常勤講師 川邊雄大

キーワード 漢学・咸宜園・真宗（本願寺）・近代（化）・東京帝国大学文科大学

【参考】東京帝国大学仏教関係年表

明治10年（1877）東京大学・文学部設立。

明治12年（1879）原坦山（曹洞宗）、和漢文学科講師となり仏教典籍の講義を担当（～明治21年。印度哲学開講の濫觴）

明治14年（1881）和文学科漢文学科に印度哲学・支那哲学を追加

明治15年（1882）哲学科に東洋哲学（印度哲学（※吉谷寛寿・東）及支那哲学（井上哲次郎））科目増

明治18年（1885）南條文雄、講師として梵語を講義（～24年。梵語学開講の濫觴）。

明治19年（1886）帝国大学令。文学部→文科大学

明治23年（1890）村上専精（東）、印度哲学講師。

明治24年（1891）井上哲次郎、「比較宗教及東洋哲学」講義を担当（～30年）。

明治26年（1893）帝国大学令中改正勅令。講座制実施。印哲・梵学は講座なし。

明治30年（1897）帝国大学を東京帝国大学と改称。

明治31年（1898）姉崎正治、「宗教学」講義。

明治34年（1901）梵語学講座設置、高楠順次郎担任。

明治37年（1904）文科大学学科規則改正、文・史・哲3学科へ。印度哲学科設置、高楠順次郎が印度哲学史を開講。

明治38年（1905）宗教学講座設置、姉崎正治担任。

明治40年（1907）印度哲学科、第一回卒業生。

大正6年（1917）印度哲学講座設置、初代教授に村上専精。

大正7年（1918）大学令。3学科→19学科。

大正8年（1919）帝国大学令。文科大学→文学部。梵文学科設置（昭和7年、印哲と合併）

大正10年（1921）印度哲学講座増設、第1講座（村上専精）・第2講座（木村泰賢之）

大正12年（1923）印度哲学科、第1講座（木村）・第2講座（常盤大定）。（大15、第3講座（島地大等））

◎真宗出身の代議士

明治23年（1890）第1回衆議院議員選挙 石川舜台（東）・林道永（黄檗）が立候補したが落選。

田中善立（東、哲学館）、安藤正純（東、鳩山内閣文相）、金尾稜巖（西、広島、衆院）

◎参考文献

東京帝国大学『東京帝国大学五十年史』上冊（東京帝国大学、昭和7年）。

東京帝国大学『東京帝国大学学術大観』総説・文学部（東京帝国大学、昭和17年）。

吉田久一『清沢満之』（吉川弘文館、昭和36年）。

江上波夫編『東洋学の系譜』第1・2集（大修館書店、平成3・4年）。

新田義之『澤柳政太郎』（ミネルヴァ書房、平成18年）